

学位論文題名

「その後」からみる親にとっての不登校問題

－北海道内の親の会を対象として－

学位論文内容の要旨

従来の“不登校”研究において、わが子の不登校経験を有する親の実態は十分に明らかにされてこなかった。しかし近年、不登校「その後」に生きづらさを抱えている子どもが一定数いるとの研究結果が示されたり、その中でも“ニート群”に該当する子どもが焦点化されたりするなど、不登校によるマイナスの影響への関心が高まりつつある。本研究は、「その後」という視点からわが子の不登校を経験した親の意識と、そうした親たちが利用する親の会組織へのアプローチを通じ、これまで十分に目配りされてこなかった親にとっての不登校問題を明らかにすることが目的である。

本論文は、七つの章によって構成される。

第一章では、先行研究を検討した結果、①不登校を経験した子どもの実態に関しては「その後」への注目が進みつつあるのに対し、親への注目は不登校の渦中から一貫して弱いこと、②従来の親研究の内容に関しては、わが子の不登校を乗り越えていくポジティブな物語が類型化される傾向にあり、逆に、親が感じることになる苦悩や葛藤といったネガティブな意識が十分に論じられていないこと、③これまでの親研究が不登校の親の会利用者へのアプローチからなされることが多いにもかかわらず、親の会組織に関しては実践報告の域を出ない知見が大半であることが見出された。

こうした点をふまえ本研究では、次の二つの課題を設定し、それらを計五つの章に分けて検討した。第一に、不登校「その後」という視点から、わが子の不登校によって親たちにみられる学校観をめぐる気持ちの揺らぎ—本論文では“アンビヴァレンス”と定義—がどう生じ、どのように変化していくのかということを検討した(第二章、第三章)。そして第二に、アンビヴァレンスやそれに伴う苦悩を抱える親たちにとっての親の会の意義に関して、親の会組織と構成員への着目を通じて明らかにした(第四章、第五章、第六章)。

具体的に第二章では、7名の母親への二回にわたるインタビュー調査をもとに、不登校

中に生じる学校観をめぐるアンビヴァレンスを検討した。その結果、不登校の当初には学校に行くことを当然視する既存の価値観で対応する親がいる一方で、最初から学校に行くことを自明視しない新しい価値観で子どもに対応する親の存在が明らかとなった。だがこうした出発点の違いはあっても、やがてすべての親たちが相反する二つの価値観の間で揺らぎ、アンビヴァレンスに身を浸すよう変化していく。このとき気持ちの葛藤を強く認識してしまう関係とは距離を置き、反対に、その苦悩を緩和させる効果を持つ親の会との関係は強まっていくという傾向から、親自身に内在するアンビヴァレンスは他者との関係性において外在化するものとしても捉えることができた。

第三章では、道内の親の会利用者を対象としたアンケート結果をもとに、量的な面から親たちのアンビヴァレンスを検討した。144名のデータを分析した結果、アンビヴァレンス体験は約8割に共通してうかがえ、とくに将来のことを考えたときに気持ちの揺らぎが顕著になるという傾向から、親たちの「その後」にもアンビヴァレンスが継続する可能性が明らかとなった。このとき、学校観をめぐるアンビヴァレンスは「その後」という現在や将来において、子どもはこのままでいいのか否かといった「わが子をめぐるアンビヴァレンス」へと変容していく。ただし一方で、親としての自分自身のあり方を悩み続けているケースもわずかにみられたため、この場合には「親役割をめぐるアンビヴァレンス」が不登校中から一貫して続いているものとみなすことができた。

第四章以降では、親の会の構成員を会の担い手である“リーダー層”、積極的に例会に参加している“中心層”、例会にはほぼ参加していない“周辺層”に分類した上で、こうした違いも視点としながら引き続き分析を行った。

第四章では、道内にある親の会23団体のリーダー層へのインタビューを手がかりに、親の会にみられる組織的特徴を検討した。先行研究では親の会のセルフヘルプ・グループとしてのあり方が強調されてきたが、そうした見方は例会への注目によって得られた一面的なものである。本研究の分析では、当事者だけで組織される親の会はセルフヘルプ・グループとしての要素は強くなるが、会を存続させるには難しさを抱えており、他方で支援者が固定的となってリーダー層に位置する親の会では、構成員の面からは純粋なセルフヘルプ・グループとは言えないものの、会を長く継続しやすいという知見が得られた。しかし全体的にリーダー層が固定化し、それに伴いかれらの高齢化が進行しつつある。その意味で、どの会でもいかに存続していくかが課題として浮上してきている。

第五章では、親の会利用者のうち、例会に積極的に参加し続けている中心的なメンバーの実態を検討したところ、かれらの「不登校観」は義務教育に対して否定的な要素が強く、

さらにその子どもたちは周辺層の場合と比べて、学歴が「中卒」および中退経験率が高いという傾向が明らかとなった。ここから中心的なメンバーの実態として、「その後」に至っていても不登校によるスティグマが顕著であるために、積極的に親の会に参加し、学校に否定的な価値観をいわば「信念」として抱き続けているのではないかと考えられた。

最後に第六章では、もう一方の周辺的なメンバーに焦点を当て、かれらがなぜ積極的に親の会に出向かないのかを検討したところ、経験談が飛び交う例会の場において、他人の語りを聞くことを回避できない“つらさ”に起因するものと考えられた。このとき、中心的なメンバーは不登校に肯定的で、学校批判的な新しい価値観を「信念」としているため、例会参加を経ても大きな気持ちの揺らぎは起こりにくい。他方で周辺層の場合、他人の語りを聞くつらさばかりでなく、新しい価値観を保持する中心的なメンバーとの意見の相違もまたつらいのではないかと推察される。周辺的なメンバーの場合、現在では学校に行くことを当たり前とみなす既存の価値観が優勢を占めるようになってきているからである。

以上から、わが子の不登校が親たちの「その後」にインパクトを残し、ともすればアンビヴァレンスが湧き起こってくるのも否めないマイナス面を含む経験であることは明白である。こうした知見は、ハッピーエンドの物語が強調されてきた従来の研究に新たな要素を付け加えるものである。その際、先行研究では親の不登校受容に関して、「学校をめぐる価値から子どもをめぐる価値へ」という転換論が主流となってきたが、こうした見方もまた不十分である。本研究で示したように、学校をめぐる価値にも子どもをめぐる価値にも、それぞれに両義的な考え方がアンビヴァレントに共存し得る。これらをふまえて「その後」から親たちの実態をみた場合、不登校によって引き起こる学校観をめぐるアンビヴァレンスを避けることは難しいが、しかし学校観をめぐるアンビヴァレンスに向き合ってこなかったがゆえに、「その後」の生活にわが子をめぐるアンビヴァレンスが払拭しがたい苦悩となって残る可能性がある」と解釈することができる。

学位論文審査の要旨

主査 教授 小内 透
副査 准教授 浅川 和幸
副査 教授 間宮 正幸
副査 教授 小野寺 理佳 (名寄市立大学)

学位論文題名

「その後」からみる親にとっての不登校問題

－北海道内の親の会を対象として－

本論文は、「親にとっての不登校経験」を『不登校』その後」の視点から、実証的に解明しようとしたものである。

近年、「不登校」後に「ひきこもり」や「無業」になるケースが多いため、研究の焦点が『不登校』その後」に移動しつつある。しかし、親にとっての『不登校』その後」の問題は扱われることが少ない。この点をふまえ、本論文では、義務教育段階を終えた「不登校」経験をもつ子どもの親を対象にして、『不登校』その後」の観点から、わが子の「不登校」経験が親に与える影響について明らかにした。その際、北海道にある23の「不登校の親の会」とその会員に対する郵送法による量的調査(有効回収票173)および各団体のリーダー層や一般会員に対する半構造化面接法による質的調査(有効回収票52)でえられたデータをもとに、分析を行っている。

わが子の「不登校」が親に与える影響に関する先行研究では、わが子の「不登校」中に学校に登校させるべきか、子どもの意志を尊重すべきかといったアンビヴァレンスが、わが子の「不登校」を受け入れることによって、解消されていく過程が描かれがちである(第1章)。しかし、親にとっての「不登校経験」と『不登校』その後」に関する親の語りを分析すると、『不登校』その後」にいたっても、過去の「不登校経験」を語る際、アンビヴァレンスを抱え続ける親たちが少なくない(第2章・第3章)。しかも、親たちのアンビヴァレンスは、子どもの現在そして将来について語る時にも見いだされた。そのアンビヴァレンスは、子どもがあるがままでよいとする考え方と本当にそれでよいのかというものであり、同時に、親がどこまで子どもの現状や未来に責任を負うべきかをめぐるものであった。ここで見いだされた現実、先行研究で語られていた「不登校」の終了がアンビヴァレンスの解消につながるという「ストーリー」が必ずしも妥当でないことを意味している。このように、従来の先行研究の見直しにつながる知見を提示できたことは、「不登校」研究に対する本論文の大きな貢献の一つといえる。

一方、ほとんどの「不登校の親の会」は、会を管理・運営するリーダー層、例会に参加する中心

層、例会に参加しないが会員であり続ける周辺層の3つの層から構成されていた(第4章～第6章)。

このうち、リーダー層には、学校の教師を含め、わが子が「不登校」を経験していない者も多く、彼らには学校を絶対視する既存の価値観を否定する考え方が強く見られた。そして、こうしたリーダー層が率いる会の方が団体として長く存続する傾向が見いだされた。一般に、「不登校の親の会」は、社会運動団体としての側面をもつセルフヘルプグループとして捉えられる傾向が強い。しかし、ここで見いだされた結果は、「不登校の親の会」の中には、必ずしもセルフヘルプグループとはいえない団体が存在することを意味している。この点で、本論文は従来の見方とは異なる重要な知見を「不登校」研究に提示したものであり、高く評価できる。

リーダー層と異なり、例会に参加することの多い中心層には、学校を絶対視する既存の価値観を否定しきれない者たちがいる。そうした人たちの中に、『不登校』その後』に至っても、現在と将来の子どものあり方についてアンビヴァレンスを抱える者たちが存在した。さらに、周辺層は、わが子が『不登校』その後』の場合が多く、例会でわが子が「不登校」の渦中にある人たちの語りを聞くと、過去がよみがえるのがつらいため、例会に参加しないことが多かった。にもかかわらず、会員としてとどまっており、彼らの場合にも、わが子の過去の「不登校経験」をベースにした現在と将来の子どもに対する不安が払拭し切れていない可能性が見いだせた。

このように、わが子が『不登校』その後』に至っても、親の会に所属し続けることと、わが子の「不登校」をめぐる過去のアンビヴァレンスを背景にした、わが子の現在と将来をめぐるアンビヴァレンスが関連しあっている可能性が浮き彫りになった。この点を明らかにしたことも、本論文の成果として評価できる。

なお、本論文で用いられたアンビヴァレンスの概念は、先行研究の概念を改良したものであるが、さらなる精緻化が必要な部分も見いだされた。また、親の会に所属していない者は検討の対象から外れていた。そのため、アンビヴァレンスの概念をさらに洗練し、検討の対象を拡大して研究を続けることが、今後の課題となろう。

以上のように、本論文は、わが子の「不登校経験」が『不登校』その後』に至っても、親に影響を与え続ける可能性があることを明らかにした点で、「不登校」研究の前進に大きな貢献をしたと評価することができる。

よって著者は、北海道大学博士(教育学)の学位を授与される資格があるものと認める。